

私の読んだ本 (23)

B.E. ノルティンク著, 大鹿・金野訳

「研究人間 — 創造的科学技术者への道 —」(共立出版, 1975)

B.E. ノルティンク著, 大鹿・住吉訳

「続研究人間 — 科学技术者の創造性を生かす道 —」(同上)

和田 昭 允 (物理)

この二、三年、本屋の店頭でよく“……に成功する法”, “……のコツ”あるいは, “How to ……”などという表題をみかける。これらの本が, 大衆向き, サラリーマン向き, もしくは経営者向きにかかれた一種の処世術であるという分類に立てば, ここに紹介する本書は, 研究者, とくに経営者的研究者たらんとする人に向けて書かれたものである。これは, すこしうがち過ぎた見方かも知れないけれども, 副題の「創造的科学技术者への道」からいっても, まあ, 当らずといえども遠からずといえよう。ただし, 研究者・技術者の処世(処研究?)の教科書として見るか, あるいは彼らの生態学として読むかは読者の自由である。

紙面が少いので, 目次から抜き書きして見ると, 章立ては, 「何を」, 「どこで」, 「いつ」, 「誰が」, 「いかにして」, 「なぜ」研究するかというようになっている。たとえば, 第3章には, “ひとつのポストにどれ位いればよいか”という節があり, その中に下に示すような図が出ている。いろいろと思ひ当ることのある図だが, 新しいアイデアに対する柔軟性が, 自分の年齢あたりで急降下しているのを見るのはイヤな感じのするものである。理学部教授会の平均年齢はどの辺になるのだろうか。しかし, 例外ということもあるに違いない。

さて, 続編の方では, 研究者の生態観察という要素がさらに強くなっており, 章は, 「科学者という

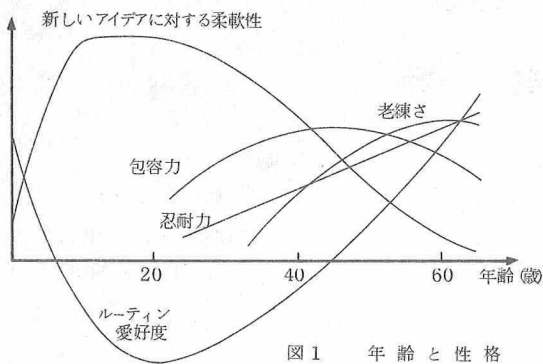


図1 年齢と性格

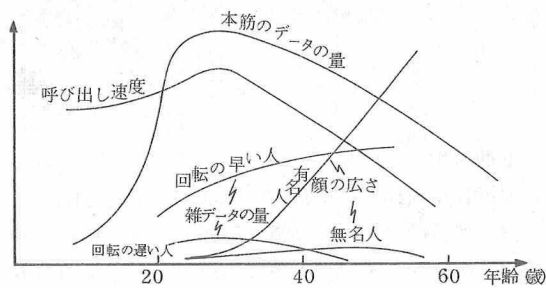


図2 年齢と記憶

種族」「研究所の解剖学」「研究所の生理学」「上級研究者」「下級研究者」「研究所の戦略」「研究所の倫理学」などである。

傑作なのは、最後の章に“正直と馬鹿正直”“嫉妬”“謙譲”などについて説かれていることである。

全体としてまじめな本であり、参考になることや耳の痛いこともいろいろと書かれている。しかし、だんだん読んでいくうちに、私自身は初めに書いた

ふたつのうちの、生態学として受けとる方になって来た。これは、「株で儲る法」を読んで大金持になれる筈はないと思いついておられるせいかもしれない。このような意味からいっても、若手向きというよりは、むしろ定年後に大学長、研究所長、企業の研究担当重役になられる方、あるいはなろうとしておられる方々の一読をおすすめする。